

作品梗概集 4

1. ここに掲載した各梗概は、十七世紀フランス演劇研究会における発表をまとめたものである。
2. 各々の梗概の執筆は、研究会での発表者が担当した。
3. 掲載の順序は、原則として、担当者の意図を尊重し、担当者別にまとめ、その中では初演年代順とした。
4. 初演年代は、原則としてデイエルコウフ = オルスボエルに拠ったが、他の研究者の推定に基づく場合はその研究者の名前を年代の後に付した。
5. 読者の便宜を考慮して、作品梗概集の後に索引を付した。

Rotrou : *L'Heureux Naufrage*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1631-32年 オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1637年

主な出典 Lope, "El naufragio prodigioso", Don Manuel de Sousa, "Ó el naufragio y príncipe trocado."

悲喜劇が流行し、ロトルーがこのジャンルの作品を多く書いた時代の、多数の作品のうちの一つ。場所は大体二箇所、主な舞台はダルマシアの女王の宮殿。時間はすくなくとも数ヶ月以上。変装、決闘(暗殺)、処刑の場面などがあり、特に決闘場面でのピストルの使用は時代錯誤的である。当然、*bienséance*には反する。また、女主人公の変装は特異で、登場から終幕に至るまで、終始男装である。一方の恋人役は、はじめに彼の体験した難破のレシをする。これは『オデュッセイア』のような難破物語の系譜の中で捉えることもできる。この恋人の処刑の寸前の救出は物語のサスペンス性を盛り上げているが、主要登場人物の全員が最後まで生きており、死者は出ない。しかし、二人の恋人に利用される形になった女王の妹の処遇は明らかでなく、消化不良の印象を与える。台詞の特徴は、スタンスが途中で切れて、普通の台詞に続けられたり、問答体が挿入されることなどである。そして大人数の台詞のない端役や、トランペットの使用など、豪華な舞台が想像される。

〔第一幕〕エピールの貴族クレアンドル *Cléandre* は王女フロロンド *Floronde* と恋に落ちた。しかし、国王はもっと力のある別の国の国王との婚約を考えていた。二人は最後の手段として駆け落ちし、船出する。折りからの嵐で船は難破、クレアンドルだけがダルマシアの女王、サルマシス *Salmacis* に助けられ、その宮殿の一室で目覚める。恋する姫君は彼の前から消えてしまった。サルマシスは一目でクレアンドルに恋し、女王の妹のセファリー *Cephalie* も彼に好意を示す。一方クレアンドルはフロロンドを失って、絶望し、死を口にする。

〔第二幕〕クレアンドルをかくまったことがエピールに知られ、サルマシスは彼を返さなければ宣戦を布告される窮地にあった。クレアンドル恋しさから、それもいたしかたないと言う。そして、いつまでも「死んだ」王女のことしか頭にないクレアンドルに、なんとか諦めをつけさせようと、難破の生残りを探す。王女の死を証言させようというのである。たった一人の生残りは王女の従者リザノール Lisamor という男だった。女王はこの男に金貨を握らせ、クレアンドルの前に呼び寄せる。クレアンドルはこの男を見て驚く。王女の死を証言する彼こそ、男装したフロロンドだったのだ。フロロンド＝リザノールは合図を送り、二人の芝居が始まる。女王の様子を窺って、彼女の気持ちを確認すると、その嫉妬を避けるため、偽りの忠誠を誓い、変装を続ける。フロロンドはなんとか策略によって「囚われ」のクレアンドルを救出しようとする。

〔第三幕〕フロロンドは女王にクレアンドルとの仲を取り持つと約束して安心させ、彼と二人で策を練る。クレアンドルは二人の前で、死ぬことは諦め、命を救ってくれた女王に、恋のためではなく義務から忠誠を誓うと言う。それは「亡き王女」への不変の愛の告白であり、女王を決して恋人としては受入れないという宣言なのだ。それでも女王はクレアンドルの忠誠心に希望を捨て切れない。フロロンドはセファリーの恋心を知って、二人を競わせ、その諍いに乗じてクレアンドルを逃がそうと計画。女王にしたのと同じ約束で彼女を騙す。セファリーは別の男からうるさく付きまといわれ、この男を諦めさせようとして、自分とクレアンドルは愛しあう仲だと言う。男はクレアンドルの横恋慕だと思い、彼を遠ざける方法を考える。

〔第四幕〕クレアンドルのもとにエピール国王の死の報せが届く。次ぎの国王はフロロンドの兄である。クレアンドルはフロロンドに事実を知らせ、フロロンドは自分たちのかけた心労を嘆く。ふたりはフロロンドをダルマシアの大使に仕立てて生国に帰れるように仕組む。彼女は二重の変装をして帰国する。すべてが旨くいこうとした時、妹への偽の愛の告白を立ち聞きした女王は、クレアンドルを激しく責める。その直後、嫉妬する男とその刺客を返り討ちにした彼は拘束され、女王の判断を待つ。女王は嫉妬から彼に有罪を申し渡し、エピールへの義理立ても理由にして、処刑を命じる。

〔第五幕〕女王は自分との結婚を条件に、処刑を中止し、エピールと交戦状態に入るといえるが、クレアンドルは受入れない。妹セファリーの哀願は無論、意味がない。彼はリザノールの正体を明かし、死を選ぶ。しかし、処刑される寸前に彼女が戻ってくる。彼女は王となった兄を説き伏せ、ダルマシアとの和平のため、女王との結婚を承諾させていた。女王は兄のエピール王自らが首都の城門の外で彼女への謁見を待っているという熱意にほだされ、フロロンドとクレアンドルを許す。彼女は王を一目で恋し、二組の結婚が暗示される。(浅谷)

Rotrou : *Agésilan de Colchos*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1634-35年(ランカスター)オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1637年

主な出典 Amadis de Gaule. “La Fidelle Tromperie”と同じ。

この作品もロトルーが悲喜劇を量産した頃の多くの作品の一つで“L’Heureux Naufrage”と殆ど同じ時期に書かれた。場所は一都市とその周辺。時間は24時間以上。開幕から決闘による流血の場面があり、bienséanceに適うものであるかは疑問。男性の女装そのものが舞台上で現実にとどの程度許容されるかも問題となろう。パルフェ兄弟はこの作品とグージュノー(後述)の作品を比較することで、後者の紹介を行っている。一見するとロトルーの方が早い発表のようだが、実際は逆である。しかしロトルーが先行作品を見ていたかどうかは不明である。こちらの作品は一層原作に忠実で、構成がすっきりしており、見易いものとなっている。女装した主人公が美女の気を引くために歌が歌われ、音楽が重要な要素となっている。“Naufrage”同様、この作品でも、問答体風の台詞が特徴となっている。男性の女装という特殊な設定は“Astrée”の影響下で、舞台でも6作品が制作されたが、以降は全く姿を消し、女性の男装の多さとは比較にならない。また、「主人公が肖像の美女に恋をする」という類型でこの作品を読むこともできる。これに加え、スキュデリーの初期のロマネスクな作品に共通の要素、「生きた首」による解決、「決闘裁判」なども見られ、当時の悲喜劇の要素をふんだんに含んでいる。

【第一幕】ブリュネオ Brunéoはフロリゼル Floriselと戦って敗れる。倒れている所にコルコス Colchosの王アジェジラン Agésilanが通りかかって助け起こす。ブリュネオは肖像を差しだしながら、いきさつを話す。不実なフロリゼルを倒せば、その美女が手に入るはずだった。肖像を見てアジェジランは一瞬にして恋に落ちる。下僕のダリネル Darinelとはちょうど恋愛問答の途中だった。恋に取り憑かれた彼は、下僕の冗談半分の提案に従って、王女ディアヌ Dianeに会おうと決心する。

【第二幕】フロリゼルはまたも刺客を倒し、自分の不実を認めながらも、それを改めない。一方、アジェジランは女装してダライド Daraïdeと名乗る。彼はシドニー Sidonie女王の宮殿の回廊で歌を歌い、王女の心を捕えるのに成功した。王女は女王に彼を紹介し、彼は出入りを許される。そこへ彼が助けたブリュネオが現われ、女王の復讐はまた果たされなかった、と告げる。女王はこの報告を「幸いな不幸、不幸な幸い」と言う。女王がまだフロリゼルを恋していることは明らかである。

【第三幕】ディアヌと聞き役のアルデニー Ardenieは連れ立って花を摘む。泉の側の花園である。アルデニーはその前夜、ダライドが夢にうなされているのを聞いた。それはきっと王女に対する深過ぎる愛情のせいだ、と言う。二人ともダライドに夢中になっている。アルデニーがいない間にアジェジランとダリネルがやって来て、眠っている王女にキスをする。そんなことも束の間、王女を侮辱する男が現われ、アジェジランが決闘で王女的美貌を擁護する。見事に敵を倒したアジェジランは女王の復讐の代理執行人に命ぜられ、王女との結婚ではなく、ただ名誉のためにだけ、この義務を負わされる。彼は自分が王女の父を殺せば、後には殺人者の汚名、女王の自殺などが待っていることを知っている。

【第四幕】ディアヌはアルデニーから意外な秘密を聞かされる。彼女が夜明けに目撃したところで

は、ダライドは確かにコルコスの王、アジェジランだ。しかし、この打ち明け話を聞いても、王女の心にかわりはない。むしろ「彼女」が男性であってよかった。しかし、強敵のもとへ彼を出したくない王女は、告白をするアジェジランに冷たくあたる。ディアヌと「ダライド」の仲違いを宥める女王の前で、王女は彼を許す。アジェジランは女装のまま、王女にだけ分かるように誓いを立てる。フロリゼルの方は、難破に遭って、ギンダイ Guindaye の浜に打ち上げられる。彼は聞き役も多くの家臣も無くし、過去を悔いていた。偶然、そこへ女装のアジェジランがやって来て、助けを求める。二人は実は、旧知の仲であった。アジェジランはシドニーの復讐が自分に任されていると告げ、とにかくも、彼を連れ帰る。

〔第五幕〕アジェジランは策略を練る。なんとか彼を殺さずに解決をはかりたい。眠っているフロリゼルの前に女王を招き、彼はまんまと女王の後悔を引き出す。アルデニーとダリネルはこの一部始終を見ている。そこで彼らはある策略を仕組むことにする。場面が変わって、ディアヌが狂乱している。彼女は、アルデニーからアジェジランが死んだと聞かされた。彼を引付けておくためにつれないそぶりをしたり、なによりも黙って復讐に行かせてしまったことを悔いるが、遅い。いよいよ「死体」が運ばれてくる。目を蔽う王女。と、そこにいつか聞いた美しい歌声と同じ声がする。彼は死んでいなかった。自分の彼に対する強い愛情に改めて気付かされた。すべては、下僕と侍女の策略だったのだ。王女は素直に彼の帰還を喜び、永遠の愛を誓う。アジェジランは王女には父を、女王には恋人を、またフロリゼルには妻と娘を取戻してやったことになる。その「生きた首」への代償が肖像の美女である。二組の幸福な結婚が暗示されるころへほらふきの道化が登場し、一同を笑わせ、大団円となる。(浅谷)

Gougenot : *La Fidelle Tromperie.*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1633年以前(パルフェ兄弟、ランカスター)オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1633年

主な出典 Amadis de Gaule. “Agésilan de Colchos” と同じ

“Comédie des comédiens”で知られる作者のもう一つの作品。ロトルーの“Agésilan de Colchos”とほぼ同じ内容。上演された場所も同じオテル・ド・ブルゴーニュ座である。場所は女王の居城を中心にした首都。時間は24時間以上。場面の連続性はとぎれがちで、筋を追うのに苦勞する。パルフェ兄弟はこの作品のあらすじを紹介するにあたって、ロトルーでは誰に相等するか、という方法を取っているため、成立の前後関係に混乱をきたし易い。今のところロトルーの方が後であるということになっている。作品の構成はロトルーに比べて整理がされておらず、複雑な筋を繰返し台詞によって観客に教えなければならない。登場人物の年齢構成も曖昧である。数少ない男性の女装を材料とし

ているにもかかわらず、主人公の女装は「女の服を着た男」にすぎないように見え、“Astrée”のセラドンのような心理的葛藤は全くない。肖像画の美女への恋、恋する女性に接近するための女装、代理の復讐などの要素は“Agésilan”と共通だが、問題の解決方法は多少異なっている。出典、展開の主な部分は共通であるが、実際に比較してみると、似て非なる作品と感ぜられる。第四幕にアルミドル、第五幕にアルドリーヌのそれぞれ長いスタンスがあり、第五幕の場面では、「輝く雲」から妙なる歌声が聞こえて来る、とある。

〔第一幕〕フリージア Phrygia の王、アルミドル Armidore は、肖像画を手にして、従兄弟のクリダム Climdame にその美女への恋を打ち明けている。クリダムは一時の病気と笑うが、アルミドルは本気だ。男子禁制の居城に閉じ込められている姫に一目会おうと、女装までする覚悟だという。クリダムは彼の熱気に押されて、協力を約束する。一方、肖像の美女の母、シプル Cypre の女王クロリゼ Clorisée は、王女を身ごもらせて消えたフィラミール Filamire が今も恋しい。彼は昔、変装してこの国にやって来て、彼女を競い、恋人になった。しかし、今は別の国の王で、安泰に暮らしている。復讐心と嫉妬で、毎日が彼女には地獄である。そこへ海賊から逃げて来た外国の兄妹が現われ、助けを求める。女王は二人の話に同情し、王女にも引き合わせる。

〔第二幕〕この兄妹は実は、アルミドルとクリダムである。アルミドルはリュシド Lucide と名乗ってすっかり王女に気に入られる。アルミドルはクリダムにとうとうと、実際の王女的美貌を讃え続ける。アルドリーヌ Alderine の方も聞き役が呆れるほどリュシドに「恋する」。アルドリーヌへの忠誠と愛情を誓うリュシドだが、彼女が男だったらいいのに、という聞き役言葉に、王女は激怒する。女王はこの日も、フィラミールを倒したというほらふきに苦しめられる。女王が王女の肖像を描かせたのは、自分の代わりに復讐を果たした者に、王女を与えるためだったのである。クリダムは女王の苦悩ぶりを見て、重臣に過去のいきさつのすべてを聞く。

〔第三幕〕女王の拒絶にあったブルゼルブ Bruserbe は、フィラミールの首を持ち帰らなかった。女王は安堵するが、もし彼が死ねば、自分も生きてはいない決意は固めている。ブルゼルブはそういう女王の未練に気付き、侮辱されたと感じて、今度は武力によって女王を脅迫し、結婚を承諾させようとする。そこへリュシドが現われ、見事にブルゼルブを屈服させ、二度と卑劣なまねはしないよう誓わせる。次ぎにやって来たフィラモン Filamon も、フィラミールを倒したと、嘘をつく。リュシドは女王に代わってこのほらふきを懲らしめ、ブルゼルブ同様、女王にも王女にも近付かないと公言させる。こうして女王の復讐はリュシドに任される。

〔第四幕〕クロリゼはリュシドの勇気を讃え、必ず復讐を果たすように、念を押す。リュシド＝アルミドルはそれに答え、フィラミール殺しの旅に出ようとする。王女はそれに反対である。彼女はいかに強いとはいえ、女性であるからだ。絶望しきっている王女にリュシドは再び、王女への忠誠と深い愛情を説く。ついに彼は自分の正体を明かす。膝をついて許しを乞う彼を王女は決して受入れない。王女に拒絶され、難敵のフィラミールに対面しなければならないアルミドルは半狂乱に陥る。王女の聞き役に慰められつつ、とにかく眠ることにする。明日は出発である。

〔第五幕〕リュシドがたったあと、お互いの恨みで結び付いたブルゼルブとフィラモンとが策略を

巡らせている。二人で女王母娘を捕える相談である。彼らは手薄になった首都を包囲し、クロリゼのもとへ使者を遣わす。条件は前と同じ、ブルゼルブには女王を、フィラモンにはアルドリーヌを与えることだ。しかし、降伏の寸前にリュシドと謎の戦士が敵の陣営を急襲し、暴君たちを打ちのめす。夜半、城に戻ったリュシドは眠っている謎の戦士と女王とを対面させる。彼こそが不実なフィラミールだった。女王は自分の恋心を認める。その間、天のお告げでアルミドルとの恋を果らせるように言われた王女は、彼の帰還を喜び、受入れる。またアルミドルがフィラミールの甥だったことも判り、フィラミールの現在の妻の病死が知らされ、クロリゼとフィラミール、アルドリーヌとアルミドルの結婚が宣言される。最後に捕虜となっていた二人の暴君は釈放される。(浅谷)

Rotrou : *Bélisaire*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1642-43年(推定)オテル・ド・ブルゴーニュ座

刊行 1644年

出典 Mira de Amescua. *El ejemplo mayor de la Desdicha*.

17世紀に『ベリセール』と題される作品は三つ書かれた。製作年はデフォンテーヌ(1640)、ロトルー(1642)、ラ・カルプルネード(1659)の順に古い。ロトルーの『ベリセール』はデフォンテーヌと同様、スペインの劇作品を出典とする。ロトルーの作品の方が原作に忠実で、統一感があり、幕切れも鮮やかである。原作にあった喜劇的な場面や、アフリカへの旅などの枝葉を取り除き、流血シーンもない。筋、時間、場所共に規則に適合しており、ビヤンセアンスの考慮がなされている。場所はユスティニアヌス帝時代のコンスタンティノーブルに設定されていて、ベリセールのモデルとなったベリサリオスは実在の人物。ニカの反乱(532)、北アフリカ征伐(533、34)、イタリアでのヴィティジェとの戦い(540)のどの時点かは不明である。作品中では、ガンジス川、アジア方面の軍功が強調されている。

〔第一幕〕

アジアを平定してコンスタンティノーブルに戻ったベリセール *Bélisaire* を巡礼者に変装したかつての部下、レオンス *Léonse* が刺客となって待ち構えていた。レオンスは以前、ベリセールを恋していたユスティニアヌス帝の皇后、テオドル *Théodore* に命じられてここにいた。皇后はベリセールに気持ちを受け入れられなかったのを恨んで、彼を殺そうとしている。だが、凱旋したベリセールは自分の手柄よりも、部下のレオンスを称えて、この「巡礼者」の不平を宥める。レオンスは剣を抜かず、ベリセールに「ある女」が彼を非常に恨んでいると告げて去って行く。一方、テオドルはベリセールの恋人となったアントニー *Antonie* を使って、次の機会を待つことにするが、夫である皇帝はテオドルの前でベリセールに帝国の権力の一部を譲り渡す。テオドルは益々ベリセールを憎み、新たな暗殺者を指名する。

〔第二幕〕

ベリセールを愛しはじめたアントニーはひとり、テオドルへの義理立てと自分のままならぬ感情の行方を嘆き続けていた。そこへベリセールとテオドルが別々に現れる。テオドルに気付かないベリセールはアントニーの最近のつれなさを責める。ここで、テオドルの憎悪ははっきりと嫉妬と交ざり合う。そして眠ったベリセールに彼の副官であり、今は暗殺者となったナルセス Narses が忍び寄る。しかしナルセスはベリセールの枕元に置かれたメモに自分の昇進を告げる文章を見付け、その余白にレオンスがしたと同じ警告を書き、去って行く。めざめたベリセールはそのメモを皇帝に見せる。皇帝はナルセスの筆跡を認めて問いただし、暗殺を命じた犯人がテオドルだと知る。テオドルは次いでフィリップ Philippe を差し向け、皇帝が迷っている間にベリセールを殺させようとするが、フィリップもベリセールの寛大さの前に屈服する。

〔第三幕〕

ベリセールはフィリップからテオドルが確かに自分を狙っているのだと知る。眠ったふりをして皇帝とナルセスの話を聞き、寝言で本心を語るとみせかける。皇帝と側近がタピスリの後ろへ隠れると、テオドルとフィリップがやって来る。テオドルはフィリップの不守備に腹を立て、自分で「眠っている」ベリセールを殺そうとする。とうとうテオドルはフィリップから剣をとりあげ、彼につき立てようとした瞬間、皇帝と側近が飛び出していってこれを止める。テオドルが言い訳する間もなく皇帝は彼女を叱責し、「目覚めた」ベリセールに王杖と月桂冠を与える。しかし、彼はその与えられたばかりの特権を利用して、すかさず、テオドルの為に許しを乞うのだった。

〔第四幕〕

ベリセールの好意や寛大さは逆効果だった。テオドルはベリセールと二人きりになって、自分の殺意は愛のためだと言い放つ。彼女には自分で仕掛けた罠の結果とはいえ、ベリセールがアントニーを恋することも我慢ならない。ベリセールを誘惑するのに失敗したテオドルは彼がアントニーに渡した手紙を取り上げ、彼が誰よりもアントニーを愛していると思い知らされる。テオドルはこの手紙をベリセールが自分にあてたものと偽って皇帝に示す。皇帝は彼の「裏切り」に激怒し、彼を拘束させる。無実を訴えるベリセールの声は友人を失った悲しみと、妻を奪おうとした者への嫉妬に遮られて、皇帝には届かないのだった。

〔第五幕〕

ベリセールは皇帝に下賜された指輪を使用的レオンスに返す。テオドルに恨みを買うようなおぼえはなかった。だが、皇帝の言うとおり、既に死ぬ覚悟は出来ていた。「魂だけが、時間と運命に左右されずにすむ」からだ。レオンスもベリセールの無実をよく知っている。次に訪れたナルセスも同様だ。いよいよフィリップがベリセールを呼び出す。剣を取り上げられ、皇帝に最後の別れを告げると、フィリップさえも後悔にくれさせる。だが皇帝の命令は絶対で、刑が執行される。皇帝も側近も皆嘆いている所へ、テオドルの侍女、カミーユ Camille が登場し、ベリセールの無実を証言する。しかしすべては遅すぎた。処刑に立ち会ったフィリップが戻って来て、ベリセールの昇天を報告する。(浅谷)

Desfontaines : *Bélisaire*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1640年 オテル・ド・ブルゴーニュ座

刊行 1641年6月

出典 Rotrou : *Bélisaire* と同じ。

ロトルーの『ベリセール』と同じ出典を用いて書かれた。本作品では、時代設定はより具体的に見える。登場人物として、イタリア遠征の敵方であるヴィティジェ(作中では、ゴート王)の名前が上がっている。また反乱をおさめたとのせりふも見られるから、ベリセールの業績を一時に凝縮して紹介する意図があるのかもしれない。歴史上の人物としての位置付けをはっきりさせたかったのだろう。いずれにせよ、ユスティアヌス帝治下のコンスタンティノーブルが舞台である。場所はどのように王宮の周辺であり、時間の経過もとりたてて日数を要するものではないが、筋はベリセールと皇帝の姪ソフィーとの恋にヴィティジェとザクセンの女王アマラゾントとの三角関係が絡み、散漫であることは否めない。劇中では、自殺のシーンがあり、ピヤンセアンスはあまり考慮されない。ロトルー作品とをもって違う点は、結末である。ベリセールは最後にテオドル自らの心変わりによって、皇帝の前で無実を証明され、処刑を免れる。また、物語の軸になるベリセールの恋は反乱から彼が救ったザクセン女王のアマラゾントに対するものであり、ロトルーではアントニーにあたる娘役のソフィーはベリセールに片思いしている。しかし、最後は彼を思い、無実の罪を晴らそうとしたソフィーとベリセールが婚約して、それを登場人物全員が祝福する大団円となる。

ロトルーがこのデフォンテーヌの作品を実際に見たり、読んだりした証拠はない。

〔第一幕〕

ザクセン女王アマラゾント Amalazonte をヴィティジェ Vitigez の侵略から救い出したベリセール Bélisaire は、ユスティニアヌス Justinian 皇帝に二人に対する寛容を進言し、二人の服従を取り付けると、皇帝のしたで帝国を統治するよう命じられる。皇后テオドル Théodore はベリセールにひかれており、皇帝の姪ソフィー Sophie もこの昇進が自分とベリセールを結び付けてくれると思う。だが、テオドルは今の境遇から、ベリセールと彼女にはなんの可能性もないと分かっている。そこで、ナルセス Narses に命じて、暗殺をたくらむ。交換条件は、姪のソフィーとの結婚であった。ソフィーはナルセスを説得しようとするが、ナルセスは王女を手に入れたいので、一時はベリセールを殺そうと考える。ソフィーの気持ちを思えばナルセスは友人のベリセールを殺すことはできないとも迷う。恋するソフィーの幸福か、皇后の口添えをえたソフィーとの結婚のどちらかを選ばなければならない。

〔第二幕〕

ベリセールは召し使いに命じてナルセスを呼びにやる。森の中で一人、ナルセスを待っていると、

悲鳴が聞こえる。デンマーク王子のイスキリオン Iskirionが何者かに襲われていた。咄嗟に王子を助けたベリセールは手傷を負った暗殺者の顔を見て驚く。それはナルセスだった。彼は謎めいた言葉を残し、ベリセールを殺せず、自殺する。一方、命拾いしたイスキリオンは、ベリセールに感謝して、友情を誓い、その証にダイヤを贈ろうとする。彼はこれを受け取る。ナルセスの死を目の当りにしたベリセールは、一人になると、死にたくなる。それを召し使いに止められるが、ナルセスを殺したのは自分だといひ、死体を片付けさせる。

〔第三幕〕

イスキリオンのベリセールに対する感謝は本物だが、まさか自分を助けてくれた人物が恋仇とはまだ知らない。そのうえ、テオドルの甘言に乗せられたとはいえ、ソフィーを手に入れるための策略は今一つ納得がいかない。テオドルは彼にベリセールを殺すよう、促す。彼は理性より、恋に従おうと決心した。しかしベリセールはアマラゾントに好意を抱いていた。彼女に直接打ち明け、強く迫るが、受け入れられない。そしてベリセールの命を狙ったイスキリオンは彼の指輪に恩人の印を見付け、また恋のための行為と暗殺を許す寛容に打たれてすぐに剣を捨てる。彼らは永遠の友情を誓う。テオドルにイスキリオンをすすめられたソフィーは無関心である。ベリセールはアマラゾントを、アマラゾントはヴィティジェを恋し、ソフィーはベリセールを、イスキリオンはソフィーを恋していた。

〔第四幕〕

ヴィティジェは憂鬱そうなアマラゾントの心を悩ます敵が自分ではなく、ベリセールだと知る。彼女が恋しているのは確かに侵略者であった彼自身であると分かる。ふたりは相思相愛となった。しかし、彼らはすぐにベリセールとソフィーがやって来るのを見る。ベリセールを本当に恋しているのは、ソフィーである。彼はこの感情が身分違いだといって、王女を遠ざけようとする。ソフィーはそのようなベリセールの態度に激しい怒りを覚える。一方、イスキリオンは裏切ったテオドルになじられ、代わりに、ドリストル Doristelが差し向けられる。眠っているベリセールを殺そうと忍びよっていったドリストルは、枕元の書類に自分を称えるベリセールの文を発見する。彼もベリセールを殺せず、その書類に剣と、警告の手紙を添えて退場する。目覚めたベリセールは手紙を読む。そこには、「惨たらしい計画を避けたければ、汝の女に注意せよ、命が危うい」とあった。

〔第五幕〕

ベリセールは自分の命を狙うのが、拒絶を受けたソフィーではないかと疑う。テオドルはソフィーとベリセールのいさかいを知って、見当はずれにもソフィーに彼と別れるように詰め寄る。言うことを聞かないので、彼女はちょうどベリセールから届いたソフィーあての手紙を取り上げ、それを利用して陰謀を考えつく。その手紙はソフィーに対するベリセールの暗殺を甘んじて受けるどころか、進んで死んでやるという恨みの手紙だったのだが、皇后は彼が命を差し出すほどソフィーを愛しているのだと誤解する。自分あてと言い張ってそれを皇帝に渡し、ベリセールは裏切り者だと告げるテオドルは、一人になると、彼に対する気持ちは彼を殺さなければ消えない、と言う。拘束されているベリセールのもとへ、イスキリオンとソフィーが脱獄を勧めに来る。ベリセールはそれに

抵抗する。そこへテオドルが現れ、怒りをぶちまける。彼はテオドルに対する変わらぬ尊敬の念を述べる。テオドルはベリセールの言うことを納得し、皇帝に許しを乞う。またアマラゾンとヴィティジェもベリセールのために慈悲を乞う。テオドルの弁明ですべての解決がはかられ、イスキリオンの口添えで、ソフィーはベリセールに与えられる。皆がこの婚約を祝福する。(浅谷)

Rotrou : *La Sœur*.

ジャンル 五幕韻文喜劇

初演 1642-47年 オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1647年

主な出典 Della Porta, "Sorella."

ロトルーの最後の喜劇。30年代のラテン喜劇の導入、スペイン種の輸入と並ぶ、イタリア喜劇に学んだ作品。場所は主人公の家の周辺。時間はほんの数時間以内、場面の連続性は保たれているものの、筋の一貫性はない。複雑な筋、錯綜した人間関係を整理し、全体に原典に忠実な構成で、殆ど翻訳とっていいにもかかわらず、フランス風の舞台に仕上げている。モリエールの『町人貴族』の中で使われるトルコ語のトリックを最初に使用した下僕と老主人の対話は笑わせる。トルコの習慣や言葉を舞台で(悪意が多少とも感じられるが、)具体的に表現している。しかしこれは「現実」のものではない。他にモリエールは第三幕の五景の対話をヒントに、『いやいやながら医者にされ』や、『スカパンのわるだくみ』の台詞を作っている。主人公の若旦那とその下僕の策略が次々に現われる証人によって暴露されるという喜劇性とは裏腹に、この主人公と「妹」との近親相姦のテーマが隠されており、万事めでたしという解決に至るまでは複雑な経路を必要とする。この作品を一言でまとめると、最初の嘘、すなわち、妹と偽って恋人をつれ帰った嘘をつき通すために策略が段々にエスカレートしていく過程である。その中にトルコ語のトリックなども含まれている。

【第一幕】レリー Lélie は絶望しきっていた。下僕のエルガスト Ergaste が言うには、一家の父のアンセルム Anselme が旧友の娘エロクセーヌ Eroxene と自分とを明日にも結婚させようと考えている。妹のオーレリー Aurélie にも別の結婚話がある。実はレリーとその妹には秘密があった。この妹のオーレリーは生き別れになった彼の妹ではなく、妹探しの旅の途中、ヴェニスで知り合った宿屋の侍女、ソフィー Sophie なのである。誰も彼女のことを覚えていないのをいいことにオーレリーに成りすまし、「昼は妹、夜は恋人」の生活を送っていた。親友のエラスト Eraste に相談するのが一番ということになった。彼とエロクセーヌは恋人同士だからだ。レリーはエラストにすべてを打ち明ける。エラストは協力して、最近つれないエロクセーヌともよりを戻したい考えであった。

【第二幕】レリーとソフィーはなんとかして父の考えを変えようとするが、うまくいかない。逆に父は二人の並はずれた兄妹仲の良さを怪しむ。そこへエルガストが割って入り、二人の仲の良さは、トルコ風の習慣に忠実なだけで、長いオーレリーのトルコでの生活がそうさせるのだと、もっとも

らしい説明をする。その上、今度のオーレリーの結婚話はとんだ間違いで、相手の金持ちのやもめは食わせものだと老主人の気持ちをぐらつかせる。

一方、エロクセヌは意気地のないエラストの気を引こうと、つれないそぶりだ。これは侍女のリディー Lydie の入れ知恵である。エラストはレリーのために一肌脱いで、オーレリーをまずは自分で引き取り、それからレリーに渡すことにする。無論これは芝居だが、リディーはその交渉の現場を見てしまい、不実な恋人の裏切りに激怒する。その頃、父アンセルムの旧友、ジェロント G eronte と彼の息子オラース Horace が帰ってくる。

〔第三幕〕ジェロントは死んだと伝えられたアンセルムの妻、コンスタンス Constance の手紙を持っていた。知らせをきいたレリーとオーレリーは青くなる。二人の秘密はすぐにばれてしまうだろう。ジェロントはまた、オーレリーがどこかで見た顔だと思う。彼はソフィーがヴェニス の宿屋の侍女として働いていた時に客だったのだ。だがアンセルムはエルガストとレリーの言うことを信じると言って、友と仲違いする。一人残ったオラースはトルコ語しか分らない。エルガストはこれをうまく利用する。全然トルコ語など分らないくせに、通訳をすると称して、ジェロントの証言は酒に酔った上の戯言で、真に受けてはならない、と納得させる。一旦納得したのに安心し、エルガストが去ったあと、再びジェロントが現われて、子供たちの策略が露見する。

〔第四幕〕すっかり安心したエルガストとレリーの前にコンスタンスが帰ってくる。二人は「オーレリー」の素性が今度こそ明かされると恐れるが、事態は急転。彼ら皆がソフィーと思い込んでいた女性がまさにオーレリーだったのだ。それでは二人は本当の兄妹になってしまうではないか。恋は兄妹の愛情の錯覚だったのか。近親相姦の罪が重くのしかかってくる。エラストはエロクセヌに全てを打ち明け、分ってもらおうとするが、エロクセヌとリディーは承知しない。エラストはレリーに相談に行く。一方、リディーはエロクセヌの叔父のオルジー Orgie にレリーとの破談を責められ、長年の秘密を暴露しようと決心する。

〔第五幕〕リディーは今、アンセルムの家にいる娘こそがエロクセヌで、エロクセヌと思われている娘がオーレリーだと言う。二人の娘は生まれてすぐに、財産目当てに入れ替えられた。叔父の陰謀で、本当のエロクセヌを探さずにいた結果である。あとで財産家になった本当のエロクセヌの両親の遺言で、娘が見つからなければ、財産は叔父の物だった。レリーが「エロクセヌ」と結婚していれば、正真正銘の近親相姦になるところだった。レリーはソフィーこと本当のエロクセヌと、エラストはエロクセヌこと本当のオーレリーと結ばれる。レリーは「妹」を見付だし、本当のエロクセヌは宿屋の侍女ではなく、叔父から財産を取戻した令嬢となる。一家全員が顔を揃え、残ったリディーとエルガストは手をつなぐ。(浅谷)

Desmaretz de Saint-Sorlin : *Mirame*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1641年1月14日、オテル・ド・ブルゴーニュ座員

劇場 パレ・ド・リシュリユー(パレ・ロワイヤル) 座
出版 1641年
主な出典 なし

『ミラム』は、リシュリユー枢機卿によって建設されたパレ・ロワイヤル(当時の名称はパレ・ド・リシュリユー)座の柿落しのために執筆、初演された。人物は「定型的」(ランカスター)で作品自体は弱い。しかし、その上演は、「フランスでも、また可能なら諸外国でもこれほど豪華な芝居を観たことはなかった。」(*Gazette*)と言われるほど豪華で、遠近法が舞台にはじめて本格的に取り入れられて評判を呼んだ。上演は成功を収め、オテル・ド・ブルゴーニュ座で1646-7年のシーズンに再演されている。規則に関しては、時間は24時間で時の一致を遵守しているが、時間の経過を照明を使って、真昼から夜、そして夜明けの空の状態で表現した。場所は海にのぞむ王宮の宮殿の一ヶ所で、場の一致の規則を遵守している。第五幕でのコルコスからの使者の登場はデウス・エクス・マキーナの働きをしていて筋の一致は守られていない。

【第一幕】(舞台は海に臨むHeracléeの王宮の庭園)コルコスの王子の寵臣アリマンArimantは、ビチュニーの王女Mirameに恋をし、大艦隊を率いて来襲してきた。彼はビチュニーの国王を破ることで、身分違いの恋を成就しようとしている。国王は、ミラムにフィリジーの国王アゾミールAzamirとの結婚を命じる。彼女は誰とも結婚する気はないと拒否する。そこへ、アゾミールがアリマンの来襲を聞いて援軍にやってくる。一同が去った後、ミラムは侍女のアルミールAlmireにアリマンを密かに愛していることを告白する。アルミールは、愛と国を救うために、夜の闇にまぎれてミラムにアリマンと会うことを勧める。

【第二幕】(その夜)国王の許に緒戦の敗北の報がはいる。国王とアゾミールは、明朝出陣することにする。二人の去った後、アリマンが現れ、ミラムに恋を告白する。ミラムは拒む。絶望したアリマンは剣を折る。ミラムは、随臣の剣を与えて、彼を慰める。彼女は、この剣を父の血で濡らしてはならないとアリマンに命じる。(夜が明けてくる)アリマンは、名残を惜しみながら立ち去る。

【第三幕】国王が凱旋してくる。ミラムの心を探るため、国王は彼女に捕虜になったアリマンと会うように命じる。アリマンが連れてこられる。絶望したアリマンは、死を決意しているが、彼女の心が自分にあることを知り、勇気づけられる。彼は、海岸の要塞に連れて行かれる。一方、アゾミールはミラムの心がアリマンにあることを知り、彼女を諦めようと決意する。

【第四幕】ミラムの許にアリマンが自殺したという知らせがくる。取り乱した彼女は、自殺しようとする。そこへ、アゾミールがやってくる。ミラムは物陰からアゾミールの様子をうかがう。アゾミールはアリマンの死を嘆き、ミラムに愛されないならと死を決意する。アゾミールの高潔な人柄に感動したミラムは、彼の前に現れ、彼を死なせないためにアゾミールと結婚すると告げる。アゾミールが喜んで国王に報告に行った後、ミラムは侍女の勧めで毒薬を飲んで自殺することに決める。

【第五幕】国王の許にミラムの死の知らせがはいる。そこへ、コルコスからの和平の使者が到着し、アリマンをコルコスの王位継承者とするという。使者は、アリマンがフィリジーの王の息子でアゾ

ミールの弟であると出生の秘密を明かす。国王は落胆し、アゾミールも弟と恋人を自分が殺してしまったと嘆く。そこへ、ミラムと一緒に毒を仰いで死んだはずの侍女が現れる。彼女は、ミラムが飲んだのは只の眠り薬だと告げる。ミラムも眠りから醒めて現れる。そこへ、アリマンの傷は浅く、生きているという知らせが入る。アゾミールは二人の結婚に賛成し、国王も同意する。(橋本)

Gilbert : *Les Amours de Diane et d'Endimion*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1657年初頭、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1659年

主な出典 Apollodorus

Ovid (ただし、Gilbertは出典としてあげているがOvidに記述なし)

ジルベールは、ローマでスウェーデンのクリスチナ女王の秘書をしていたが、この芝居は女王の依頼で執筆した。オテル・ド・ブルゴーニュ座は、1656年11月に機械仕掛けの芝居 *Grand Astianax* を上演し大成功を収めていた(ディエルコウフ=オルスボエル)。このため座長フロリドール等は第二の機械仕掛けの芝居を計画し、この作品を上演した。しかし、当時マレー座がトマ・コルネイユの『ティモクラット』*Timocrate* を上演し、大当たりをとっていた。このためこの芝居は不入りで上演を中止した。ただし、クリスチナ女王が1658年3月2日に観劇。また、モリエール一座は、1660年6月25日から7月18日まで11回上演している。モリエール一座での上演では、ラ・デュパルクが夜の女神役を演じた。この時の収入は、5722リーヴルでこの年度第4位の当たり(全30作中)であった。他にコメディ・フランセーズが1681~82年に8回上演し、かなりの当たりを取った。宙乗りや歌の場面もあるが、その後の機械仕掛けの芝居と比べて仕掛けは強調されていない。規則は遵守している。

〔プロローグ〕(夜)アポロン Apollon に侮辱された愛の神 Amours は、復讐のためにアポロンが妹のディアーナ Diane を愛し、ディアーナはほかの男アンディミオン Endimion を愛するようにした、と語る。

〔第一幕〕(ラトモス山、夜)ディアーナと夜の女神が馬車に乗って現れる。ディアーナは、泉のほとりに眠らせたアンディミオンの姿を見に来た。アンディミオンが目覚めると、ディアーナは立ち去る。彼は、曙の女神の恋人セファール Cephale に、ディアーナと会わせてくれと頼む。

〔第二幕〕アンディミオンは、この地の怪物を退治し、怪物をディアーナに生贄として捧げる。アンディミオンは、ディアーナと会い、二人は互いの愛情を告白する。(夜明け)アンディミオンを立ち去らせた後、アポロンが馬車に乗って現れる。アポロンは、ジュピテルが自分とディアーナの結婚を認めたと告げる。ディアーナは結婚を拒否して立ち去る。怒ったアポロンは、アンディミオンに復讐を誓う。

〔第三幕〕アンディミオンは、アポロンを恋仇と思い、嫉妬に苦しんでいる。メルキュール Mercure が現れ、今後一切ディアヌと会ってはならないと告げるが、アンディミオンはこの命令を拒否する。天が暗くなり、雷が鳴り、稲妻がひらめくが、彼は怯まない。ディアヌが現れ、彼に自分の愛を保証する。アポロンが現れ、恋を諦めるように命じるが、彼は怯まず、アポロンに挑戦する。二人は、明日再び会って、対決することを取り決める。

〔第四幕〕ディアヌは、アンディミオンの身を案じている。メルキュールは、ディアヌに、神々の意志としてアポロンと結婚するように伝える。ディアヌはこの命令を拒否する。アンディミオンは、ディアヌに、神々の命令でこの山を追放されることになったと告げる。ディアヌはアンディミオンをデロス島に帰し、そこで二人で暮らすことにする。アンディミオンは、渋々この提案に同意する。

〔第五幕〕アポロンは、素直にアンディミオンがギリシャに帰ることを疑っている。ディアヌは、アンディミオンを無事にギリシャに帰すようにメルキュールに命じるが、不安は募るばかりである。そこへ、セファールが現れ、アンディミオンがアポロンの矢に当たって死んだとディアヌに告げる。ディアヌは、神々を呪い、冥界にアンディミオンを取り戻しに行く。(橋本)

Donneau de Visé : *Les Amours de Venus et d'Adonis*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1669/70年、マレー座

出版 1670年

主な出典 オヴィディウス『転身物語』巻10

他に Natalis Comes: *Mythology* (1616, Padua)

Marino : Adone

ドノー・ド・ヴィゼが、マレー座の依頼によって最初に書いた機械仕掛の芝居である。作者によれば、大成功を収め、三ヶ月続演した。神々の宙乗りが多く登場し、この成功に装置家デューニ・ブッフカン Denis Buffequin の作った機械仕掛けが寄与した。初演ではヴェニウス役をラ・シャンメレが演じている。三単一の規則は遵守している。

〔プロローグ〕(天上)愛の神 Amour が、雲に乗って舞台の上を飛び回る。神々は、愛の神の仕業でヴェニウス Venus が狩人のアドニス Adonis を愛するようになったことを非難している。愛の神は意に解さない。

〔第一幕〕(イダリーの森)水の精のクリゼイス Chriséis は、狩人のアドニスを愛している。しかし、ヴェニウスを愛するアドニスは、彼女に見向きもしない。ヴェニウスが、雲の間から、アドニスの前に降りてくる。二人が愛の語らいをしていると、時の神 Heure が、飛んできて、マルス Mars がやってくると警告する。ヴェニウスは秘密をかぎつけられないようにその場を去る。

〔第二幕〕天が開き、武装したマルスが馬車に乗って降りてくる。クリゼイスは、愛するアドニス
をマルスに殺されたくない。彼女は、マルスに、アドニスを殺さずに、絶えずヴェニユスにつきま
とって二人を分かれさせるように勧める。そこへアドニスが見れる。アドニスは、マルスの脅迫に
も怯まない。マルスは、彼の勇気に感嘆して、その場を立ち去る。その後ヴェニユスが現れる。ク
リゼイスは、ヴェニユスにアドニスが臆病風に吹かれたと中傷する。ヴェニユスは取り合わない。二
人に全く相手にされないクリゼイスは、怒って立ち去る。

〔第三幕〕ヴェニユスは、アドニスに手を出さないようにマルスに頼む。マルスは、ヴェニユスの
頼みを聞き入れるふりをする。クリゼイスは、ヴェニユスとアドニスの仲睦まじい様子をマルスに
報告し、彼の嫉妬をかきたてようとする。マルスは、雲間から降りてきたメルキュール Mercure に、
ヴェニユスが天に帰らねばならぬように仕向けてくれと頼む。メルキュールは承諾する。

〔第四幕〕マルスはヴェニユスを口説くが、ヴェニユスは相手にしない。クリゼイスは、マルスに
アドニスを殺されないために、ヴェニユスがマルスを愛しているふりをするように勧める。ヴェニ
ユスは、クリゼイスがアドニスを愛していることに気づき、彼女の勧めに応じない。クリゼイスは、
アドニスに、ヴェニユスがマルスを愛していると嘘をつく。しかし、アドニスはヴェニユスと会っ
て、二人の愛を確かめる。そこへメルキュールが現れ、アポロンが嫉妬に狂っている、天に戻って
神々の心を静めるように勧める。ヴェニユスは、天から愛の神を呼んで、アドニスの護衛をさせ、自
分は天に戻る。アドニスは、気晴らしに狩に行く。

〔第五幕〕マルスは、クリゼイスに、猪を放ってアドニスを殺す計画を語る。愛の神が絶望して天
に昇っていくのを見て、計画が成功したことがわかる。ヴェニユスは、アドニスが死んだという知
らせを受けて、驚いて馬車に乗って天から降りてくる。ヴェニユスは、アドニスの友人から彼の死
の様相を聞く。クリゼイスは、アドニスの後を追って死ぬと言い残して去る。瀕死のアドニス
が運ばれてくる。アドニスは、「ヴェニユスの足元で死ねて本望だ」と言い残して死ぬ。クリゼイスが、
アドニスの槍で自殺したと知らせが入る。ヴェニユスの嘆きは天に達し、天上にジュピテル Jupiter が
現れ、アドニスを花に変えると告げる。ヴェニユスが、感謝するために天に昇ろうと、馬車に乗る。
その場に、馬車に乗ったマルスが現れ、二人はにらみあう。二台の馬車は天に昇る。(橋本)

Donneau de Visé : *Les Amours de Bacchus et d'Ariane*

ジャンル Comédie heroïque (三幕)

初演 1671/71年、マレー座

出版 1672年

出典 Plutarch's Life of Theseus

Diodorus Siculus, III, IV

音楽 Molière

ド・ヴィゼがマレー座のために書いた三作目の機械仕掛の芝居。成功を収め、三ヶ月続演された。他の機械仕掛けの芝居と同様、装置の転換、踊り、合唱、神々の宙乗りが観客を驚かせたが、特にこの芝居では、舞踏と歌の場面が多く、これほど多数の人物が登場したことはなかった。1685年にコメディ・フランセーズで再演されたが、その時は登場人物も歌手の数も減らされた。トマ・コルネイユの『アリアーヌ』 *Ariane* 創作の契機となった。規則に関しては、時の一致は遵守、場所は機械仕掛の芝居であるだけに各幕毎に異なった背景を用いるが、ナクソス島の中という設定である程度配慮はされている。なお、音楽を担当した Molière は、劇作家のモリエールとは別人である。

〔プロローグ〕 (ナクソス島)メルキュール神 *Mercur* が空中に現れ、島民にバッカス *Bachus* を迎える準備をするように命じる。島民が用意に取りかかると、ジュノン *Juno* が天に現れ、人々を追い払おうとする。すると愛の神 *Amour* が空中に現れ、ジュノンをとめる。ジュノンは、しぶしぶ立ち去る。愛の神に促されて人々は再び準備に取りかかる。人々は、バッカスを讃える歌を歌う。

〔第一幕〕 (浜辺) テゼ *Thésée* に捨てられたアリアーヌ *Ariane* は、この島に取り残された。そこへ、一隻の豪華な船がやってくる。隠れてみると、バッカスとその従者たちが下船し、従者たちは音楽に合わせて歌い踊る。一行は、休憩のため解散する。バッカスは、見知らぬ美女を夢に見た。アリアーヌが姿を現すと、バッカスはアリアーヌがその美女であることに気づく。アリアーヌはテゼの行方を尋ね、捨てられたいきさつを物語る。バッカスは彼女に愛を告白するが、アリアーヌはその気になれない。テゼを探しにいかせた島民が戻ってきて、テゼは嵐のためにこの島に戻ってきたと知らせる。アリアーヌがテゼを探しに行くと、入れ違いにぶどう酒に酔ったバッカスの従者たちが現れ、歌い踊る。

〔第二幕〕 (葡萄畑) テゼは故郷の妻の許に戻りたがっているが、バッカスがアリアーヌに恋をしたと聞いて、嫉妬と体面からアリアーヌを取り戻そうとする。アリアーヌは、テゼの甘い言葉によって和解する。アリアーヌは、テゼへの気持ちに変わりはないとバッカスに告げる。メルキュールは、ジュピテルが彼女とバッカスの結婚を望んでいると告げるが、アリアーヌは耳をかさない。メルキュールは、天に帰る。バッカスの従者 *Comus* は彼女を説得しようとし、バッカスの従者たちが彼女を讃える歌と踊りを見せるが、彼女の心は動かない。

〔第三幕〕 (壮麗な宮殿) この地の王は、バッカスがアリアーヌを妻にしようとしていることを知り、彼女をこの宮殿に泊める。テゼの心はやはり妻にある。アリアーヌは、今日結婚しようとテゼに提案するが、テゼははかばかしい返事をしない。アリアーヌは、テゼが自分を愛していないことに気づき、バッカスと結婚すると言って、その場を去る。テゼの許に、バッカスの求婚をアリアーヌが承諾したという知らせが入る。落胆しているテゼの許に妻からの手紙が届く。手紙には、テゼが別の女を愛していると知って、別の男と結婚すると書いてある。テゼは、絶望して立ち去る。バッカスとアリアーヌの前で天が開き、ジュピテルの宮殿が現れる。ジュノンも怒りを解いた。従者たちは、二人の結婚を祝って歌い踊る。ジュピテルは二人を祝福する。(橋本)

作品梗概集索引

Bidar	: <i>Hippolyte</i>	III	79
Boyer	: <i>Ulysse dans l'île de Circe</i>	III	95
Corneille, Thomas			
	: <i>Ariane</i>	III	89
	: <i>Bérénice</i>	IV	83
	: <i>Camma</i>	III	88
	: <i>Circé</i>	III	98
	: <i>Darius</i>	IV	85
	: <i>La Mort d'Achille</i>	III	91
	: <i>La Mort de l'empereur Commode</i>	VI	83
	: <i>Le Comte d'Essex</i>	VI	92
	: <i>Persée et Démetrius</i>	VI	85
	: <i>Timocrate</i>	IV	81
Corneille, Pierre	: <i>Andromède</i>	III	96
Desfontaines	: <i>Belisaire</i>	VII	100
Desmaretz de Saint-Sorlin	: <i>Mirame</i>	VII	103
de Visé, Donneau			
	: <i>Les Amours de Bacchus et d'Ariane</i>	VII	107
	: <i>Les Amours de Venus et d'Adonis</i>	VII	106
Garnier	: <i>Hippolyte</i>	III	74
Gilbert			
	: <i>Hypolite</i>	III	78
	: <i>Les Amours de Diane et d'Endimion</i>	VII	105
Gougenot	: <i>La Fidelle Tromperie</i>	VII	96
La Pineliere	: <i>Hippolyte</i>	III	76
L'Hermite de Vauzelle	: <i>La chute de Phaéton</i>	III	94
Lully et Quinault			
	: <i>Alceste</i>	VI	88
	: <i>Atys</i>	VI	91
	: <i>Cadmus et Hermione</i>	VI	86
	: <i>Thésée</i>	VI	89
Mairet			
	: <i>Chryséide et Arimand</i>	IV	63

	: <i>La Silvanire</i>	IV	66
	: <i>La Sylvie</i>	IV	65
	: <i>Les Galanterie du duc d'Ossonne</i>	IV	68
Pradon	: <i>Phèdre et Hippolyte</i>	III	81
Rotrou			
	: <i>Agésilan de Colchos</i>	VII	94
	: <i>Antigone</i>	VI	80
	: <i>Belisaire</i>	VII	98
	: <i>Cleagénor et Doristée</i>	IV	72
	: <i>Crisante</i>	VI	78
	: <i>Iphigénie</i>	VI	81
	: <i>La Bague de l'Ou'bli</i>	III	83
	: <i>La Belle Allphrède</i>	III	85
	: <i>La Sœur</i>	VII	102
	: <i>Laure Persecutée</i>	III	86
	: <i>Les Occasions perdues</i>	IV	70
	: <i>L'Heureux Naufrage</i>	VII	93
Tristan l'Hermitte			
	: <i>La Marianne</i>	III	74
	: <i>La Mort de Chrispe</i>	IV	78
	: <i>La Mort de Sénèque</i>	IV	77
	: <i>Osman</i>	IV	80
	: <i>Panthée</i>	IV	75

* ローマ数字Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ、Ⅶは掲載した既刊号数を示す。